

## 企画展「林芙美子と東京放浪」実施報告

橋本由起子\*

### 目次

はじめに
1. 本展の概要
(1) 事業概要
(2) 企画の意図と目的
2. 展示構成
・プロローグ～三つの『放浪記』
・第1章 『放浪記』以前
・第2章 東京放浪
・第3章 職業放浪
・第4章 放浪の終わり
・エピローグ～『放浪記』80年
3. 文学作品を素材にした展示～博物館での ころみ
おわりに

キーワード 林芙美子 放浪記 女性 職業 職業婦人 関東大震災 展覧会 文学 都市

### はじめに

2010年（平成22）11月23日から2011年（平成23）1月10日まで、東京都江戸東京博物館常設展示室5階第2企画展示室で、企画展「林芙美子と東京放浪」を開催した。この展覧会は、昭和時代に活躍した作家、林芙美子の『放浪記』を題材に、関東大震災を機に大きく変貌をとげた東京の街の様相や風俗を、江戸東京博物館の収蔵資料をつかって紹介したもので、2010年（平成22）が『放浪記』刊行80年にあたることに合わせて企画した。

『放浪記』は、行商の両親に連れられて九州北部を転々とした幼少時代から、尾道での青春時代を経て単身上京し、事務員や工員、カフェの女給など、さまざまな職業に就きながら作家になる夢を追い続けた女性を主人公にした小説で、1930年（昭和5）の刊行時で50万部を売り、大ベストセラーとなった。小説には創作の部分もあるものの、その多くは、林芙美子が東京での生活を本格的にはじめた1922年（大

\*東京都江戸東京博物館学芸員

正11) 頃からつけていた日記や雑記を素材としていて、林芙美子の自伝的要素が強く、また、ひとりの女性の目をとおした都市の記録としても読むことができる。そこで本展では、この特長から、都市で暮らす女性の職業意識や生き方についても考察を加え、林芙美子や『放浪記』が、長く人々に親しまれるその理由と魅力について紹介した。博物館が文学作品を素材に、自館の収蔵品を活用して開催した展覧会の一例として、本事業の概要を報告する。

## 1. 本展の概要

### (1) 事業概要

【表1】

展覧会名	企画展「林芙美子と東京放浪」
会 期	2010年(平成22)11月23日(火・祝)～2011年(平成23)1月10日(月・祝) 開催日数38日
会 場	江戸東京博物館常設展示室5階第2企画展示室 (約300㎡)
主 催	東京都、東京都江戸東京博物館
観覧料金	常設展示室の入場料で観覧することができる。 (一般600円、大学・専門学校生480円、中学生(都外)・高校生・65歳以上300円、中学生(都内)・小学生以下無料)
関連事業	① えどはくカルチャー「旅する女・林芙美子」 2010年(平成22)12月1日(水)14:00～15:30 会場:1階会議室 学芸員による講座。定員130名、事前申し込み制、受講料:一般 1,000円 ② ミュージアムトーク 企画展「林芙美子と東京放浪」みどころ 2010年(平成22)12月3日、10日、17日(各金曜日) 16:00から30分程度 会場:第2企画展示室(展覧会会場) 学芸員による展示解説。自由参加制、無料。

展覧会を企画するにあたって、江戸東京博物館では「3T」を明確にすることが要求される。3Tとは、①タイムリーネス、②ターゲット、③トップ・オブ・ザ・セールスポイントを指す。「林芙美子と東京放浪」展はその3Tを下記のように設定していた。

【表2】

ターゲット	・20～30代の女性 ・都市の単身生活者
タイムリーネス	『放浪記』刊行80年 (翌2011年(平成23)が林芙美子没後60年にあたること、2009年(平成21)5月に舞台「放浪記」が2000回公演を行い、話題を呼んだことも考慮)
トップ・オブ・ザ・セールスポイント	・都市の記録文学としての『放浪記』の魅力を再発見。 ・館蔵資料を活用した展示(出品資料のうち館蔵資料は全体の約7割 ※写真パネル除く)

まず、ターゲットには、「林芙美子」や『放浪記』というキーワードから来場が期待される文学ファンのみならず、新規来館者層の獲得を目指して、20～30代の若い世代の女性や、都市に暮らす单身生活者を想定した。

## （2）企画の意図と目的

当初より開催にあたっては東京に暮らす若い世代、とくに女性に向けてのメッセージとなるような展覧会にしたいと考えていた。『放浪記』は、関東大震災から急速に復興し、モダン都市として成長していく東京を背景に、ひとりたくましく生きる若い女性を描いている<sup>1)</sup>。地方から上京し、部屋を借りて自活する『放浪記』の主人公の姿は、現代の東京に生活する多くの女性にも共通している。貧しさや社会のきびしさに押しつぶされそうになりながらも、決してへこたれず、自分の道を自分の力で切り開いていく主人公に、現代の女性たちも共感するところが多いのではないかと考えたからだ。また、老若男女を問わず、ひとりで生活する人が増えている東京の現状や未来についても、多くの人が考えるきっかけとなれば、とも考えた。

次に、タイムリーネスについては、2010年（平成22）が『放浪記』刊行80年にあたることのほか、翌2011年（平成23）が林芙美子の没後60年にあたることや、前年の2009年（平成21）に舞台「放浪記」が2000回公演を果たして話題となったことなどから、数年単位で林芙美子への注目が高まることを予想した。そして、2010年（平成22）を林芙美子関連の展覧会を開催するにはまずまずの好期ととらえた。

トップ・オブ・ザ・セールスポイントは、世の中の注目を集めるための仕掛けをあげる項目だが、今回はテーマの打ち出し方や館蔵資料の活用というところを強調して提案した。本展は文学を素材に、東京の歴史や風俗、女性の生活史について紹介した展覧会であり、会場にはその時代の歴史資料や生活民俗資料を多く並べた。これは平面的な展示に陥りがちな文学関連の展示をいかに立体的に見せるかという問題や、さまざまな興味を持った博物館利用者への対応、収蔵資料の活用という博物館が日常的に抱えている課題への対策の意味があった。自館の収蔵資料を活用して幅広いテーマの展示を組み立てることは、多彩なコレクションを持つ館として大切にしたい姿勢であり、本展では江戸東京博物館の個性を出せる展示を目指した。



【図版1】「林芙美子と東京放浪」チラシ様々な職を転々としていた頃（大正13年頃）の林芙美子の写真を使った。

## 2. 展示構成

【表3】

プロローグ～三つの『放浪記』
第1章 『放浪記』以前
第2章 東京放浪
第3章 職業放浪
第4章 放浪の終わり
エピローグ～『放浪記』80年

上記のように、展示は6つのパートで構成した。各パートの概要は下記のとおりである。

### ・プロローグ～三つの『放浪記』

『放浪記』は、1930年（昭和5）7月に改造社の『新鋭文学叢書』の一冊として刊行された。多くの読者を獲得し、同年の11月には早くも続編を出版。さらに戦後の1949年（昭和24）、戦前には検閲を怖れて発表を見送った部分が『放浪記第三部』として刊行された。もともと『放浪記』は、林芙美子が上京した1922年（大正11）頃から1926年（大正15・昭和元）頃までに書いた日記や雑記をまとめたもので、発表の機会を得る度に林芙美子が書きためた文章を、時系列を問わずに並べて構成したものである。

プロローグでは、まず、『放浪記』という作品に対する林芙美子の思いの深さについて紹介した。そして、『放浪記』『続放浪記』『放浪記第三部』が刊行されたそれぞれの時代の社会的背景、とくに円本ブームや、昭和初期の不況、戦争の影響を取り上げ、『放浪記』が当時の人々に支持された理由を解説した。



【図版2】『放浪記』『続放浪記』（昭和5年）『放浪記』は初回6000部を刷り、刊行から2ヶ月で40版を重ねた。



【図版3】『放浪記』の出版広告記事「朝日新聞」（昭和5年7月4日）『新鋭文学叢書』は、改造社の廉価本シリーズで1冊30銭、新進作家の作品が並ぶ。

### ・第1章 『放浪記』以前

複雑な家庭環境のもと、行商の両親に連れられて九州北部を転々とした幼少時代から、尾道を経て、東京に至るまでの林芙美子の放浪の軌跡をたどった。一家が行商先に選んだのは、筑豊の炭坑街や、瀬



【図版 4】 林芙美子の放浪 1 西日本放浪

戸内海の交通の拠点であり、近隣の島々では造船業も盛んだった尾道。それは、明治期の炭鉱業の発展や、第一次世界大戦の特需景気など、時代の趨勢によって繁栄がもたらされた場所であった。林芙美子の放浪人生の原点となる幼少時代から青春時代までを、なぜその時一家はそこに行ったのかという視点で、時代背景と場所が持つ意味を説明した。

展示では、林芙美子の移動先を地図上に落とした「林芙美子 放浪パネル」を作成し、芙美子の「放浪」の軌跡をひと目でわかるようにするとともに、移動の数の多さや範囲の広さを視覚的にも印象づけた。「放浪パネル」は、西日本編、東京編、世界編の3種を作成し、各コーナーに配置した。これには、展覧会全体を貫くキーワードとして「放浪」があることを来場者に意識させるねらいもあった。

## ・第2章 東京放浪

1922年（大正11）尾道の女学校を卒業した芙美子は、東京の大学に進学した恋人を追って上京する。

しかし恋人とは破局を迎え、折悪しく、関東大震災にも遭ってしまう。美美子は〈住みか〉を探し、〈職業〉を探して、震災からの復興期にあった東京の街を歩き回った。

『放浪記』の「放浪」には〈住みか〉〈職業〉〈男性〉の3つの放浪がある。この章では〈住みか〉の放浪に着目し(〈男性〉の放浪との関係にも言及しつつ)、『放浪記』の主人公が泊まったという木賃宿や、一時入居したとされるアパートの様子などを、東京市と同潤会の報告書などの当時の資料から紹介した。そして、ここでも美美子の

東京での転居先を地図上に落とした「放浪パネル」を展示し、震災後、東京が西へと広がり発展していったことと美美子の移動との関連性を示した。また、震災後に新たに出現した盛り場として、主人公がカフェーの女給として働いた新宿の発展を取り上げ、さらに東京の各街について『放浪記』からその特徴を拾い、説明した。例えば浅草では当時の娯楽について、銀座では女性の間で流行した髪形や服飾、化粧についてなど、当時の風俗についても紹介した。



【図版5】「林美美子と東京放浪」会場写真 ①  
女性たちの間に起った当時の流行についても紹介した。



【図版6】 林美美子の放浪2 東京放浪

### ・第3章 職業放浪

『放浪記』には主人公である「私」が就いた職業について、賃金や待遇までが記されており、そこから、当時の女性の労働環境を知ることができる。関東大震災による東京の街の変化は、必要とされる職種にも変化をもたらし、そこには女性の労働力が期待された。家の外で働くことにより女性の生き方も変わっていった。

この章では〈職業〉の放浪をテーマに、「私」が就いたこれらの職業に関する資料を集め、当時の女性の労働環境や職業観から、模範とされた人生観に至るまでを考察した。職業の中には、今ではもうない職種もあるが、その職業に関連する生活民俗資料や、写真や記事が掲載された当時の雑誌などを展示して、来場者の理解を助けるようにした。また「私」が就いた職業を職種、給料・待遇、就業時間、勤務地の項目によって整理し、一覧表にまとめてパネルにして展示した。

【表4】『放浪記』の「私」が就いた職業一覧

職業	給料・待遇	就業時間	勤務地
女中（作家・近松秋江の家、 大学教師の家など）	2週間で2円 （近松秋江の家の場合）	住込み	
露天商（下着などを夜店で販売）			道玄坂、神楽坂など
葉の見本整理	月給35円		麻布
セルロイド工場の女工	日給75銭	7時～17時まで	
牛屋の女中		①通い（？～深夜1時 近くになることもあり） ②住込み	①神田 ②浅草
カフェーの女給	・チップ制 ・1週間で10円（横浜の 店の場合）	住込み	新宿、神田 横浜など
株屋の事務員	月給35円 弁当付き	9時～16時	茅場町
産婆助手見習い			千駄木
しおり描きの内職			（小石川のアパート）
貿易店の店員	日給80銭		青山
女性新聞の記者			
「都新聞」の広告受付係	日給80銭		銀座
小学校向け新聞社の帯封書き	日給80銭		六本木付近
行商（下着、風鈴など）			大宮、新宿など

### ・第4章 放浪の終わり

1926年（大正15）、芙美子は画学生の手塚緑敏と結婚。放浪は一旦収束し、『放浪記』での成功をきっかけに、作家としての道を本格的に歩むことになった。そして1941年（昭和16）には、淀橋区下落合（現在の新宿区）に家建てた。芙美子のこだわりが随所に見られる家からは、彼女が抱く理想の生活観や

人生観がうかがえる。

この章は放浪生活が長かった芙美子が、旅先で得たアイデアを盛り込んで建てた自宅から、芙美子にとっての「放浪」と「安住」の意味を考えた。また展覧会の「起承転結」のうち「転」にあたるパートとして、これまでの章とは趣を変え、その後、生涯にわたり住み続けた落合の家を保存管理し、林芙美子資料の多くを所蔵する新宿歴史博物館から、林芙美子の遺品や原稿などの貴重な資料をお借りして展示し、林芙美子の作家としての成功から人生の終焉までを取り上げた。

各章における林芙美子の資料の出し方には、注意を払った。それというのも、会場全体をとおして芙美子の資料を漫然と展示してしまうと、いわゆる「林芙美子展」になってしまい、意図した今回の展覧会のテーマがぼやけてしまうと考えたからである。しかし、原稿や遺品といった林芙美子関連の資料の展示は、来場者に当然期待されることであり、やはり、展覧会を成立させる上で欠かせない要素であった。そこで、この章で「放浪」に対する「安住」、それを具現化した「家」を取り上げることにより、芙美子がなじんだ日常の品々として、展示のストーリーの中に効果的に配置した。林芙美子資料が展示



【図版7】「林芙美子と東京放浪」会場写真 ②



【図版8】 林芙美子の放浪 3 世界放浪

されたことによって林芙美子ファンや文学ファンの満足度もあがり、展示の厚みも増すことができたことと思う。なお、章の最後に放浪地図の3枚目となる世界放浪のパネルを展示し、結婚し、安住の場所を得た後も旅に生き続けた芙美子について紹介した。

#### ・エピローグ～『放浪記』80年

『放浪記』は、映画や舞台でも繰り返し作品化されてきた。その歴史は古く、『放浪記』が刊行された翌年の1931年（昭和6）には、浅草のレビュー団「カジノ・フォーリー」によって舞台上演されている。1961年（昭和36）には、女優の森光子が主役をつとめる舞台「放浪記」がはじまり、記録的なロングランを続けて今日に至る。

この章は人々に親しまれてきた『放浪記』80年の歴史をふり返るコーナーにした。はじめて『放浪記』を舞台上演したカジノ・フォーリーは、川端康成をはじめ当時の文壇とも交流があったレビュー団で、芙美子はこのレビュー団の文芸部長だった島村龍三と詩の仲間だったことから出入りするようになったという。展示では、カジノ・フォーリーの文芸部が発行した冊子「C a s i n o」（昭和6）に林芙美子が「放浪の唄」という詩を寄せていることなどを紹介した。

また、展示の最後に、東宝の協力を得て、舞台「放浪記」の初演から2000回公演までの舞台写真をパネルにして展示した。それによって、原作は読んだことがなくても舞台劇で『放浪記』を知ったという来場者にアピールするとともに、時代を超えて親しまれてきた『放浪記』の歴史を象徴させた。

### 3. 文学作品を素材にした展示～博物館でのこころみ

博物館で展覧会の企画をあげていく際、文学関連の展示は、美術や歴史をテーマや素材にした企画に比べ、ターゲットとなる母数が少ないのではないかと心配され、集客の面で、企画の実施を躊躇されてしまうことがある。その作品を読んだことがない、その作家を知らないという時点で、来館者の興味を



【図版9】「林芙美子と東京放浪」会場写真 ③  
舞台「放浪記」の初演から2000回公演までの舞台写真をパネルで展示。



【図版10】「林芙美子と東京放浪」会場写真 ④  
新宿の発展の様子を鉄道の路線絵図や版画などで紹介した第2章「東京放浪」の様子。

新たに引き出すことは難しいと思われてしまうからである。そこで今回は、文学作品を館蔵資料である歴史資料で読み解く展示を提案し、林芙美子や『放浪記』について、事前に知らなくても楽しめる工夫をした。結果として、内容のより一層の充実とターゲット層の拡大が図れたことと思う。

文学作品を歴史的な観点から読み解いていくと、何気なく書かれているような地名や物にも、時代によって付加された特別な意味があり、作家はその一つ一つの言葉を注意深く選んで文章に入れていることに気づかされる。また反対に、文学作品に書かれた事象が、歴史資料には残されていない記録として新たな発見をもたらすこともある。

このことから、今回の展示では、林芙美子の生涯と、大正末期から昭和初期の東京の歴史・風俗と、大きく二つの柱を設け、それぞれ独立して見ても意味がとおるように構成し、文学からの関心と歴史からの関心の双方からアプローチできるよう展示をつくり上げた。そうすることにより、すでに作品を読んだことがある来場者に対しては、本を読んで想像していた物や事柄を、展示された資料によって実際に目で見て確認する楽しさを打ち出した。また、作家や作品への予備知識を持たない来場者には、大正末期から昭和初期の東京の歴史や風俗を知ることで、その時代をユニークな視点で書いた『放浪記』や林芙美子の存在を知ってもらい、関心の幅を広げてもらう機会となるようにした。

文学のほか、美術や民俗、考古など、さまざまな視点から、都市東京の歴史や文化を紹介している江戸東京博物館において、その特色を活かし、ある分野への関心を、さらにほかの分野へともつなげてもらえるような展示を目指した。

## おわりに

今回のころみは、文学を素材にした展覧会としては実験的な面もあり、いわゆる文学展や「林芙美子展」を期待する来場者にこの展覧会がどのように思われるか、展示の意図は伝わるのか、と不安もあった。幸いミュージアムトークでの参加者の反応や、会場のアンケートからは、「林芙美子、『放浪記』への理解が深まった」「文学の展示方法としてユニーク」という声のほか、「『放浪記』を読んだことがなくても展示を楽しめた」「『放浪記』を読んでみたくなった」という声が多く聞かれた。

さまざまな興味や関心をもった博物館の利用者に対し、博物館が収蔵している資料を活用して多彩な企画や展示で応えることは、博物館の基礎体力を維持し、さらに伸ばしていく意味でも大切なことである。今回の展示は、この幅広い利用者への対応と資料の活用という博物館が常日頃から抱えている課題について、意識的に取り組んだものであるが、この報告が自館のコレクションを活用してさまざまなテーマの展示に取り組む活動の一例として、何かの参考になれば幸いである。

## 【註】

- 1) 川本三郎『林芙美子の昭和』（新書館、2003）は、林芙美子を、1920年代のモダン都市・東京が立ち上がる時に文学活動を始めた「都市の作家」ととらえ、林芙美子の放浪は、このモダン都市の成立という社会的条件によって支えられていたことを指摘している。東京の街の変遷や人々の暮らしと照らし合わせて『放浪記』を都市の文学として解説した本書は、本展でも参考にさせていただいた。

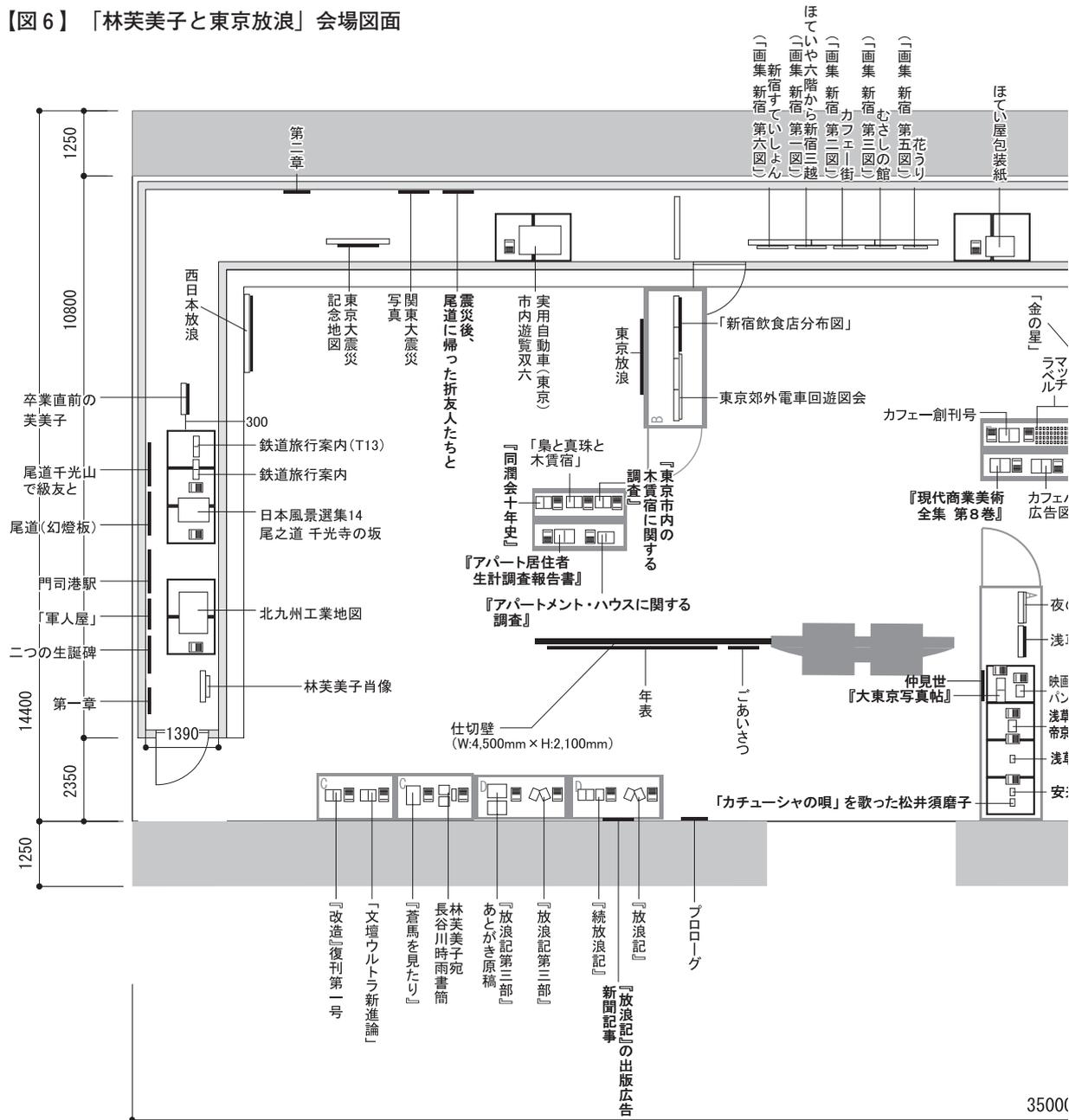
【表5】「林芙美子と東京放浪」出品資料一覧

	資料名	作者	発行	年代	所蔵先
	プロローグ～三つの『放浪記』				
1	『放浪記』	林芙美子 著	改造社 発行	1930年（昭和5）7月	東京都江戸東京博物館
2	『編放浪記』	林芙美子 著	改造社 発行	1930年（昭和5）11月	東京都江戸東京博物館
3	『放浪記』の出版広告記事（『朝日新聞』）			1930年（昭和5）7月4日	東京都江戸東京博物館
4	『放浪記』第三部	林芙美子 著	留女書店 発行	1949年（昭和24）	東京都江戸東京博物館
5	『放浪記』第三部 あとがき原稿	林芙美子 筆		1948年（昭和23）	新宿歴史博物館
6	『新馬を見たり』	長谷川時雨 筆		1937年（昭和12）7月30日付	新宿歴史博物館
7	『新馬を見たり』	林芙美子 著	南宋書院 発行	1929年（昭和4）	新宿歴史博物館
8	『文壇ワルトラ新進論』（『改造』第12巻第10号）	大宅壮一 著	改造社 発行	1930年（昭和5）10月	東京都江戸東京博物館
9	『改造』復刊第一号		改造社 発行	1946年（昭和21）1月	東京都江戸東京博物館
10	手塚（林）緑敏画 林芙美子肖像	手塚（林）緑敏 画		1930年（昭和5）4月17日付	新宿歴史博物館
	第1章 『放浪記』以前				
1	父・宮田麻太郎と芙美子、「軍人屋」の店員たち			1907～1910年（明治40～43）頃	新宿歴史博物館
2	北九州工業地図			1920年（大正9）	東京都江戸東京博物館
3	尾道			1898～1926年（明治後期～大正期）頃	東京都江戸東京博物館
4	尾之道千光寺の坂（『日本風景選集 14』）	川瀬巴水 画		1922年（大正11）	東京都江戸東京博物館
5	尾道千光山で綴友と			1916年（大正5）頃	新宿歴史博物館
6	『鉄道旅行案内』		鉄道院 発行	1919年（大正8）	東京都江戸東京博物館
7	『鉄道旅行案内』大正13年版	吉田初三郎 画	鉄道省 編	1925年（大正14）	東京都江戸東京博物館
8	卒業直前の芙美子			1922年（大正11）3月	新宿歴史博物館
	第2章 東京放浪				
1	東京大震災記念地図			1923年（大正12）	東京都江戸東京博物館
2	関東大震災写真			1923年（大正12）	東京都江戸東京博物館
3	震災後、尾道に帰った折友人たちと			1923年（大正12）	新宿歴史博物館
4	実用自動車（東京）市内遊覧双六		東京乗合自動車株式会社実用自動車部・タクシー自動車株式会社	1926～1931年（昭和初期）	東京都江戸東京博物館
5	『東京市内の木賃宿に関する調査』		東京市社会局 発行	1923年（大正12）	東京都江戸東京博物館
6	『泉と真珠と木賃宿』（『改造』第12巻第8号）		改造社 発行	1930年（昭和5）8月	東京都江戸東京博物館
7	『同潤会十年史』	財団法人同潤会/編纂		1934年（昭和9）	東京都江戸東京博物館
8	『アパート居住者生活計調査報告書』		財団法人同潤会 発行	1936年（昭和11）	東京都江戸東京博物館
9	『アパルトメント・ハウスに関する調査』		東京府学務部社会課 発行	1936年（昭和11）	東京都江戸東京博物館
10	東京郊外電車回遊図録	金子常光 作	大東京交通協会 発行	1929年（昭和4）	東京都江戸東京博物館
11	新宿すていしょん（『画集新宿風景 第六図』）	織田一磨 画		1930年（昭和5）	東京都江戸東京博物館
12	ほていや六階から新宿三越（『画集新宿風景 第一図』）	織田一磨 画		1930年（昭和5）	東京都江戸東京博物館
13	カフェー街（『画集新宿風景 第二図』）	織田一磨 画		1930年（昭和5）	東京都江戸東京博物館
14	むさしの館（『画集新宿風景 第三図』）	織田一磨 画		1930年（昭和5）	東京都江戸東京博物館
15	花より（『画集新宿風景 第五図』）	織田一磨 画		1930年（昭和5）	東京都江戸東京博物館
16	ほてい屋包装紙			1926～1935年（大正15～昭和10）	東京都江戸東京博物館
17	新宿飲食店分布図（『考現学探集』より）	今和次郎、吉田謙吉 編著	建設社 発行	1931年（昭和6）	東京都江戸東京博物館
18	カフェー「金の星」（『変わった帝都東京大正・昭和の街と住い』より）	藤森照信・初田淳・藤岡洋保 編	柏書房 発行	1991年（平成3）	東京都江戸東京博物館
19	カフェー「モウラベル			1912～1931年（大正期～昭和初期）	東京都江戸東京博物館
20	『カフェー』創刊号			1914年（大正3）	東京都江戸東京博物館
21	『カフェー』祝賀広告図案集	山名丈夫 著		1930年（昭和5）	東京都江戸東京博物館
22	『現代商業美術全集 第8巻 電気応用広告集』		アルス 発行	1930年（昭和5）	東京都江戸東京博物館
23	夜の浅草	石渡江逸 画		1932年（昭和7）	東京都江戸東京博物館

資料名	作者	発行	年代	所蔵先
24 浅草寺仁王門 (江戸の門)	前田政雄 画		1937年 (昭和12)	東京都江戸東京博物館
25 仲見世	平塚運一 画		1929年 (昭和4)	東京都江戸東京博物館
26 大東京写真帖			1930年 (昭和5)	東京都江戸東京博物館
27 映画館のパンフレット			1923～1926年 (大正末期)	東京都江戸東京博物館
28 浅草オペラ絵はがき「セヴキラの理髪師」			1917～1923年 (大正6～12)	東京都江戸東京博物館
29 浅草公園常設遊楽テラシ			1912～1926年 (大正期)	東京都江戸東京博物館
30 安米節絵はがき			1912～1931年 (大正期～昭和初期)	東京都江戸東京博物館
31 「カチューシャの唄」を歌った松井須磨子			1913～1919年 (大正2～8)	東京都江戸東京博物館
32 三井と三越 (昭和太東京百回絵版画完成判 第3景)	小泉癸巳男 画		1929年 (昭和4)	東京都江戸東京博物館
33 「東京朝日新聞 復興記念号」			1924年 (大正13)	東京都江戸東京博物館
34 新装オリジナル白粉	藤澤龍雄 画		1926～1931年 (昭和初期)	東京都江戸東京博物館
35 レートクレーンほか化粧品			1912～1931年 (大正期～昭和初期)	東京都江戸東京博物館
36 「三越」			1926年 (大正15)	東京都江戸東京博物館
37 ショールとバラソル			1912～1926年 (大正期)	東京都江戸東京博物館
第3章 職業放浪				
1 様々な職業を転々としていた頃			1924年 (大正13) 頃	新宿歴史博物館
2 新築明治婦人双六		実業之日本社 発行	1910年 (明治43)	東京都江戸東京博物館
3 製糸工場			1898～1926年 (明治後期～大正期)	東京都江戸東京博物館
4 女工手塚集		亀戸東京キヤリコ製織株式会社職工募集事務所 発行	1906年 (明治39)	東京都江戸東京博物館
5 女工手塚集内書		亀戸東京キヤリコ製織株式会社職工募集事務所 発行	1906年 (明治39)	東京都江戸東京博物館
6 女工手 手帖		工業教育会 発行	1914年 (大正3)	東京都江戸東京博物館
7 セロロイド人形			1923～1954年 (大正末期～昭和20年代)	東京都江戸東京博物館
8 教育女中きせかへ		一光 画	1917年 (大正6)	東京都江戸東京博物館
9 派出婦人会チラシ		西東町折戸通 (養育院) 愛生派出婦人会 発行	1926～1931年 (昭和初期)	東京都江戸東京博物館
10 銀座 パッカス (画集銀座 第1輯 第四図)	小田一橋 画		1929年 (昭和4)	東京都江戸東京博物館
11 カフェの女給		春陽堂 発行	1912～1931年 (大正期～昭和初期)	東京都江戸東京博物館
12 銀座のカフェ女給さん服装 (『モアトルロゾオ「考現学」再販』)	今和次郎、吉田謙吉 編著	国際画報社 発行	1930年 (昭和5)	東京都江戸東京博物館
13 「婦人グラフィ」			1926年 (大正15) 8月	東京都江戸東京博物館
14 職業婦人日子ノ像 (創作版画「新版画」第8号第2回展覧会記念号)	武藤六郎 画		1933年 (昭和8)	東京都江戸東京博物館
15 「東京新写真帖」(「少女倶楽部」第9巻第7号附録)			1931年 (昭和6)	東京都江戸東京博物館
16 「婦人職業戦線の展望」		東京市役所 発行	1932年 (昭和7)	東京都江戸東京博物館
17 「アサヒグラフィ」第20巻第9号			1935年 (昭和10) 3月	東京都江戸東京博物館
18 「婦女界」婦人の職業と副業案内号			1936年 (昭和11) 3月	東京都江戸東京博物館
19 「婦女界」職業婦人の職場打明座談会			1937年 (昭和12) 3月	東京都江戸東京博物館
20 「婦女界」職業婦人特集号			1939年 (昭和14) 2月	東京都江戸東京博物館
21 「婦女界」職業と結婚				
第4章 放浪の終わり				
1 自画像	林美美子 画		1932年 (昭和7) 頃	新宿歴史博物館
2 「清貧の書」原稿	林美美子 筆		1931年 (昭和6) 頃	新宿歴史博物館
3 「清貧の書」(「改造」第13巻第11号)		改造社 発行	1931年 (昭和6) 11月	東京都江戸東京博物館
4 予備招集志召中の緑敏宛葉書	林美美子 筆		1928年 (昭和3) 9月24日付	新宿歴史博物館
5 美美子と緑敏 淀橋区上落台白宅前			1927年 (昭和2)	新宿歴史博物館
6 上落台三輪の家で			1931年 (昭和6)	新宿歴史博物館
7 下落合の西洋館			1932～1941年 (昭和7～16)	新宿歴史博物館
8 西洋館時代の書斎			1932～1941年 (昭和7～16)	新宿歴史博物館
9 直筆厚風	林美美子 筆		1934年 (昭和9) 頃	新宿歴史博物館
10 原稿「家をつくるにあたって」	林美美子 筆			新宿歴史博物館
11 建築関係参考図書			1935～1940年 (昭和10～15)	新宿歴史博物館

資料名	作者	発行	年代	所蔵先
12 林邸建築写真アルバム				新宿歴史博物館
13 林邸建築の様子			1940年(昭和15)頃	新宿歴史博物館
14 林芙美子記念館(現・新宿区立林芙美子記念館)全景				新宿歴史博物館
15 林芙美子邸(現・新宿区立林芙美子記念館)記念館図面・細部				新宿歴史博物館
16 表札				新宿歴史博物館
17 奈と下落台自宅			1946年(昭和21)	新宿歴史博物館
18 林芙美子遺品 ワンピース				新宿歴史博物館
19 ワンピースを着た林芙美子			1947年(昭和22)	新宿歴史博物館
20 林芙美子遺品 パンブラス				新宿歴史博物館
21 林芙美子遺品 着物				新宿歴史博物館
22 林芙美子遺品 下駄				新宿歴史博物館
23 林芙美子遺品 ハンドバック				新宿歴史博物館
24 林芙美子遺品 煙管				新宿歴史博物館
25 林芙美子遺品 眼鏡				新宿歴史博物館
26 林芙美子遺品 腕時計				新宿歴史博物館
27 生前最後の写真			1951年(昭和26) 6月27日	新宿歴史博物館
28 告別式の様子			1951年(昭和26) 7月1日	新宿歴史博物館
エピソード 放浪記80年				
1 『Casino』	カジノフオーリー-文芸部 編	カジノフオーリー-文芸部 発行	1931年(昭和6)	学習院女子大学図書館
2 『カジノフオーリー-脚本集』	内外社 発行	内外社 発行	1931年(昭和6)	東京都江戸東京博物館
3 カジノ・フオーリーレビュー 団公演ちらし	浅草水族館 発行	浅草水族館 発行	1930年(昭和5)	東京都江戸東京博物館
4 『浅草新聞』	川端康成 著	先進社 発行	1930年(昭和5)	東京都江戸東京博物館
5 映画「放浪記」ポスター	木村莊十二 監督	P.C.L映画製作所 制作	1935年(昭和10)	新宿歴史博物館
6 映画「放浪記」広告(「朝日新聞」)			1935年(昭和10) 6月1日	東京都江戸東京博物館
7 映画「放浪記」撮影の様子			1935年(昭和10)	新宿歴史博物館
8 映画「放浪記」台本	久松静児 監督	東映 制作	1954年(昭和29)	新宿歴史博物館
9 創立30周年記念映画「放浪記」パンフレット	東宝株式会社 発行	東映 制作	1964年(昭和39)	新宿歴史博物館
10 舞台「放浪記」初演ポスター			1961年(昭和36)	新宿歴史博物館
11 舞台「放浪記」2000回公演ポスター		東宝事業部出版課 発行	2009年(昭和34)	原資料：東宝
12 劇楽 林芙美子役に森光子(「毎日新聞」夕刊)		東宝事業部出版課 発行	1961年(昭和36) 9月18日	東宝
13 「放浪記」舞台台本				東京都江戸東京博物館
14 舞台「放浪記」初演パンフレット		東宝事業部出版課 発行	1961年(昭和36)	新宿歴史博物館
15 「放浪記」芸術座開場15周年記念特別公演パンフレット		東宝事業部 発行	1971年(昭和46)	新宿歴史博物館
16 芸術座開場50周年記念「放浪記」パンフレット		東宝株式会社 発行	1987年(昭和62)	新宿歴史博物館
17 舞台「放浪記」2000回公演パンフレット		東宝事業部出版課 発行	2009年(平成21)	東宝
18 舞台「放浪記」初演 第二幕カフェの場面			1961年(昭和36)	東宝
19 舞台「放浪記」初演 第二幕女給部屋の場面			1961年(昭和36)	東宝
20 舞台「放浪記」初演 第三幕尾道の場面			1961年(昭和36)	東宝
21 舞台「放浪記」1000回公演			1990年(平成2)	東宝
22 舞台「放浪記」1500回公演『放浪記』出版			1999年(平成11)	東宝
23 舞台「放浪記」でめぐり返し			2005年(平成17)	東宝
24 舞台「放浪記」2000回公演 第二幕カフェの場面			2009年(平成21)	東宝
25 舞台「放浪記」2000回 公演			2009年(平成21)	東宝

【図6】「林芙美子と東京放浪」会場図面



s=1:100

